



平成28年度文化芸術振興費補助金
(地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業)

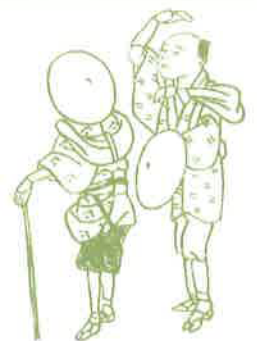
徳島県の文化の創造的再発見事業 実施報告書

「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会





[阿波国絵図] 明和7(1770)年[レプリカ]
118.5×105.2cm 徳島県立図書館蔵



目次

事業企画の背景と趣旨、概要	2
事業の記録	3
プレワークショップ	4
連携展示 「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展	
文化の森会場	5
県内巡回	
織本屋（つるぎ町）会場	8
鳴門市立図書館会場	9
海陽町立博物館会場	10
おわりに	11
資料編	
実行委員会	12
入場者数	14
関連印刷物等	16
ワークショップ記録	17

事業企画の背景と趣旨、概要

徳島県立の文化施設が集中配置されている文化の森総合公園（図書館、博物館、鳥居龍藏記念博物館、近代美術館、文書館、21世紀館）は平成27年度に開園25周年を迎えた。この間、複合施設として各館が有機的に連携しながら徳島の文化の継承と発展に一定の成果を上げてきたが、性格の異なる各館の連携には、共通テーマ設定が難しい一面があり、課題も多い。

そんな中、文書館では江戸時代末期に松尾芭蕉にあこがれて多くの旅日記を残した阿波・半田（つるぎ町半田）の人、酒井弥蔵（1808～92年）の特別企画展（2008年度）を開催していたが、かつて芭蕉の足跡をたどって作品制作を行った現代アーティスト・大久保英治が、この弥蔵に注目し、芭蕉と弥蔵をテーマにした作品制作を徳島で手がけていた（2015年～）。また、近代美術館はこの大久保による四国八十八箇所のお遍路をテーマとした特別展（1999年度）を開催してその作品を収蔵しており、博物館では「空海の足音 四国へんろ展」（2014年度）を開催していた。このような関連性に着目し、「阿波の道と人」をテーマとして各館の専門性を活かした深みのある連携企画を目指して企画されたのが、連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展である。

徳島は、江戸時代の全国レベルの五街道の整備エリアからははずれていたが、そのことがかえって阿波五街道や遍路道など、地域に根ざした街道の拡がりにつながった。本展は、その阿波の道に、徳島県立近代美術館、徳島県立博物館、徳島県立文書館がそれぞれの所蔵資料や研究成果、館の特質を活かした専門的な見地からアプローチを行った。歴史と美術がクロスする重層的な視点から光を当てる試みであり、遍路道を含む阿波の道と人の魅力を創造的に再発見する機会とすることを目指した。

具体的には、芭蕉にあこがれて自らも多くの旅をした「酒井弥蔵」（1808～1892年）と、「歩くこと」を作品制作の重要な要素とする現代アーティスト・大久保英治（1944年～）の二人が軸となり、松尾芭蕉がこの二人を結びつける企画となっている。展示されたのは、酒井弥蔵に関する旅の足跡や旅日記等の資料や、阿波の街道、遍路道などに関する歴史・民俗資料と、大久保英治による弥蔵の足跡や遍路道、阿波の五街道、松尾芭蕉の『笈の小文』をテーマとした美術作品である。また展示に先立って大久保によるワークショップも実施した。

開催にあたっては、近代美術館、博物館、文書館の三館に加えて徳島県立図書館の協力を得た。そして、これら四館が配置されている文化の森総合公園（徳島市）での開催のあと、県内の三カ所の文化施設（織本屋：つるぎ町、鳴門市立図書館、海陽町立博物館）への巡回によって、地域への波及も図った。

事業の記録

1. プレワークショップ

「美術家・大久保英治と「石」をたてる：水平と垂直、境界、祈り」	
場 所	徳島県立近代美術館講座室、文化の森前・園瀬川河川敷、博物館2階ロビー
日 時	2016年7月18日（月・祝）9:30～12:30
講 師	大久保英治（美術家）
定 員	20名 参加者11名
参加料	無料

2. 連携展示

「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展	
場 所	文化の森会場：徳島県立近代美術館、文書館、博物館、二十一世紀館、鳥居龍蔵記念博物館ロビー・図書館ギャラリー
日 時	2016年7月20日（水）～8月28日（日） *ただし図書館1Fギャラリーは7月5日（火）～8月21日（日）
入場者数	123,484人
参加料	無料
県内巡回	
場 所	つるぎ町会場：織本屋
日 時	2016年10月1日（土）～10月30日（日）
入場者数	345人
参加料	無料
場 所	鳴門市会場：鳴門市立図書館
日 時	2016年11月5日（土）～12月1日（木）
入場者数	6,604人
参加料	無料
場 所	海陽町会場：海陽町立博物館
日 時	12月10日（土）～2017年1月22日（日）
入場者数	282人
参加料	無料

● 連携展示 入場者総数 130,715人 事業参加者総数 130,726人

プレワークショップ

「美術家・大久保英治と「石」をたてる ：水平と垂直、境界、祈り」

展覧会企画の理解を深めるため、展示公開に先立って大久保英治氏によるワークショップを実施した。前半は、近代美術館講座室にて自作を語るレクチャーを行った。後半は文化の森前を流れる園瀬川河川敷にて石をつかった作品制作の体験をおこない、その後、参加者は、博物館2階ロビーに展示する大久保氏の作品〈水平と垂直1〉の最終仕上げに加わった。(詳しくは巻末の「資料編 ワークショップ記録 P.17～」を参照)



近代美術館講座室でのレクチャー



博物館2階ロビー〈水平と垂直1〉の仕上げ作業



園瀬川河川敷でのワークショップ

文化の森会場

(徳島県立近代美術館、文書館、博物館、二十一世紀館、鳥居龍蔵記念博物館 各館ロビー、図書館ギャラリー)

4つのコーナーに分け、それぞれを6つの館のロビー等に分散させて展示を行った。

(出品内容については、別途発行した展覧会解説冊子(2016年7月20日発行)も参照)

【酒井弥蔵のコーナー】文書館ロビー(2F)

酒井弥蔵の旅日記などの資料と、弥蔵の徳島での足跡をテーマにした大久保英治の作品を展示。

主な展示作品・資料：酒井弥蔵資料「天照皇太神宮豊受皇太神宮御影参」、「御影参り諸事控帳」、大久保英治「芭蕉をめざした男」など



【笈の小文のコーナー】近代美術館ロビー(2F)

酒井弥蔵と大久保英治を結びつけた松尾芭蕉の『笈の小文』に関連する作品、資料を展示

主な展示作品・資料：大久保英治「笈の小文—大久保英治・大和路百里歩行—」、松尾芭蕉『笈の小文』(酒井弥蔵旧蔵書)など



【阿波の街道、遍路道のコーナー】博物館、21世紀館、鳥居龍蔵記念博物館ロビー(2F)

遍路道や阿波の街道に関する歴史・民俗資料と阿波の街道をテーマにした大久保英治の作品を展示。

展示作品・資料：「笈」、「丁石」、大久保英治「南帰行」、「西方行」、「水平と垂直」など



【徳島の道のコーナー】図書館ギャラリー(1F)

展示期間は7月5日(火)～8月21日(日)

阿波・徳島の道をテーマにした大久保英治の作品と図書館資料を展示。

展示作品・資料：阿波国絵図、大久保英治「徳島の道」など





連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展



また4つのコーナーを回るスタンプラリーも行った。



スタンプラリーコーナー



大久保英治氏作成のスタンプ



スタンプラリーカード



景品のクリアファイル

県内巡回

巡回先の選定にあたっては、酒井弥蔵やこの企画で大久保氏が歩いた阿波の街道や遍路道に関連のある地域であり、なおかつ徳島県内での地域的な偏りがないことを考慮した。

織本屋（つるぎ町）会場

半田出身の酒井弥蔵の出身地つるぎ町での展示。会場の織本屋は、剣山へと続く街道沿いの二層うだつが残る古い町並みに、遅くとも明治初期から残っている昔ながらの酒造屋敷である。国の登録文化財でもあり、現在は保存公開されて、地域の人の交流の場としても活用されている。

弥蔵が活躍していた頃から建っているこの古い屋敷での展示は、趣深いものとなった。

文化の森会場での4つのコーナー分けではなく、「酒井弥蔵の関係資料」、「『笈の小文』をテーマにしたコーナー」、「大久保英治と阿波の街道のコーナー」の3つに再構成し、展示数を絞って紹介した。つるぎ町にちなんだ酒井弥蔵の関係資料としては、半田の小野峠に芭蕉を偲んで弥蔵らが建立した雲雀塚にちなんで開催された句会での句集『雲雀集』や、半田・貞光・郡里・重清などにおける俳人の番付を記した『蕉風俳士見立鏡』などを展示した。

関連事業：10月23日 展示解説 講師：徳島県立文書館 課長補佐 徳野隆 参加数 25人



鳴門市立図書館会場

阿波五街道のうちの撫養街道と八十八カ所の廻路道の起点であり、淡路街道の中継地点でもある鳴門での展示。図書館の玄関を入ってすぐのロビーで開催。「酒井弥蔵のコーナー」と「大久保英治のコーナー」の大きく2つに再構成して紹介した。鳴門にちなんだ資料としては『さくら卵の花旅日記』（阿波国内の四国霊場と阿波・淡路国の各霊場をめぐるときの弥蔵の旅日記。撫養岡崎から淡路への渡海の様子も描かれている）や、伊勢神宮の太々神楽講である鳴門講についての記録『鳴門講』なども展示した。また図

書館が会場のため、大久保英治の作品については、折り本や和綴じを使った作品のページをできるだけ多く開くなど、読むこともできる展示を心がけた。会場の広さがコンパクトであったことから、かえって作品・資料との距離が近くなり、親密度の増した展示となった。

関連事業：11月9日 展示解説 講師：徳島県立文書館 課長補佐 金原 祐樹 参加数 13人



海陽町立博物館会場

阿波五街道のうち遍路道と重なる部分が多い土佐街道の徳島側の終点となる県南部、海陽町での展示。巡回会場の中では最も多くの資料・作品を展示することができた。4コーナーを設けるのではなく、「酒井弥蔵のコーナー」と「大

久保英治のコーナー」の大きく2つに再構成し、全体を一望できるようにした。海陽町にちなんだ資料としては酒井弥蔵の『南方旅日記』も展示した。また、つるぎ町と鳴門市では展示できなかった「笈」や、大久保英治の42点組の大作「笈の土文、円」も、巡回先のなかでは唯一展示することができ、充実した内容となった。



おわりに

この事業を振り返るにあたり、まずポイントとなるのは、文化の森会場において実施した各館のロビーを会場とする分散型の連携展示である。

これは特に資料保存と監視体制の観点からリスクがあり、貴重な古文書等は展示できないというデメリットもあったが、美術作品については大久保英治氏の理解と協力によって展示が可能となった。展示環境として決して良くはないが、それを逆手にとる手法であった。

結果として、入場無料のロビー展示であったことも手伝い、多くの人場者数を数えることができた。このことは、性格の異なる館同士の連携による美術愛好家、歴史愛好家双方へのアピールにとどまらず、さらに幅広い層の人々が観覧したことをうかがわせる。

この結果について賛否はあるだろうが、作品や資料を鑑賞し見学するあり方の多様性に道を開くものとして、一定の成果を生むことができたと考えている。

さて、最も重要なポイントは、この企画が「歴史と美術がクロスする重層的な視点から光を当てる試み」だったことである。これを振り返るにあたって印象に残るのは、この展示を見た人たちの大久保英治氏の作品への興味や関

心の持ち方である。大久保氏が引きずって歩き、すり減ってしまった木片が美術作品として展示されているのを見た時、ストレートに強い興味を示すのは、美術愛好家よりもむしろそうではない人たちであった。ここにはことさらに「美術作品」だと構えずに、自然体で作品にふれあう様子があった。また、阿波の街道を歩いた大久保氏の足跡とその作品を、その道が通っている地域に住む人々や、あるいはお遍路の経験者が、リアリティを持って鑑賞している様子も見受けられた。そこから、人とその地域をまさに地面をなでるように探っていくという、極めてローカルな地点に立脚した大久保氏のアプローチが、美術というジャンルに収まらない普遍性のある真実や思想へとつながっていくことを予感させられた。

このように、この展示では徳島の先人で無名の酒井弥蔵のことも、大久保英治氏による現代美術の作品についても、「これは歴史的な資料だ」とか「難解な美術作品だ」という先入観をあまり持たずに接する機会を提供することができたと感じた。そこには、知識だけではなくこの地域に根ざした、そこに住む人々の実感を通じて資料や美術作品を楽しむ人々の姿があった。このような点から、この企画では「歴史と美術がクロスする」ことを自然な形で実現することができたと考えている。

(徳島県立近代美術館 友井伸一)



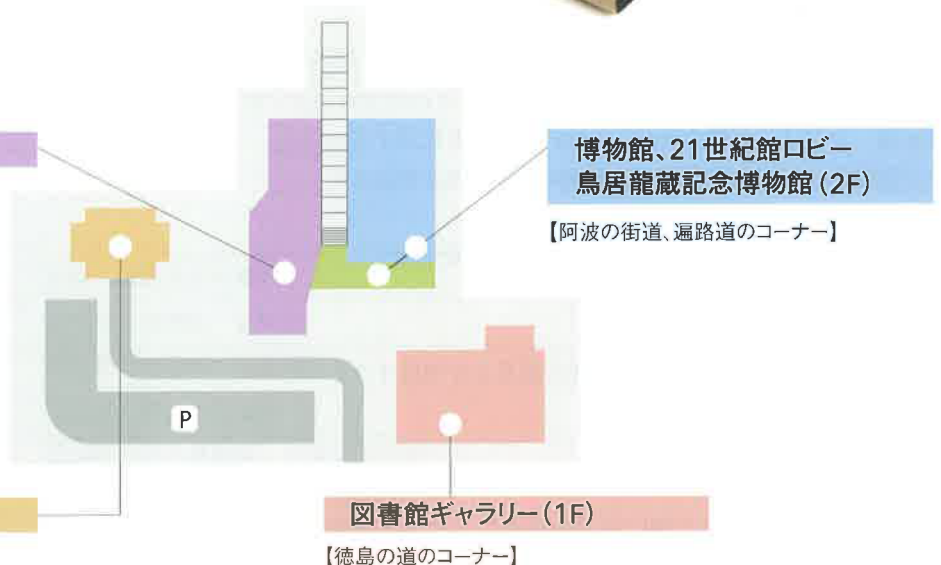
●文化の森連携展示会場

近代美術館ロビー(2F)

【笈の小文のコーナー】

文書館ロビー(2F)

【酒井弥蔵のコーナー】



〈芭蕉を目指した男1 撫養～半田～徳島～大道
撫養街道、伊予街道、淡路街道 歩行124km〉2015年
朴(ホオ)の木片 4.0×6.0×30.0cm
[原型6.0×6.0×30.0cm]



(名称)

第1条 本会は、「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会（以下「実行委員会」という。）と称する。

(目的)

第2条 実行委員会は、文化庁の「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」（以下「文化庁事業」という。）により、徳島県立近代美術館（以下「近代美術館」という。）、徳島県立博物館（以下「博物館」という。）、徳島県立文書館（以下「文書館」という。）の3館が連携し、「阿波の道と人」をテーマとしてそれぞれの館の特質を活かした専門的な見地からアプローチを行い、歴史と美術がクロスする重層的な視点から阿波の道とその人の魅力を創造的に再発見する企画事業を開催することを目的とする。

(事業)

第3条 実行委員会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一 文化庁事業国庫補助要項等に基づく「徳島県の文化の創造的再発見事業」（以下「創造的再発見事業」という。）の計画策定に関すること。
- 二 前号計画に基づく事業の実施に関すること。
- 三 その他前条の目的を達成するために必要なこと。

(構成)

第4条 実行委員会の委員は、近代美術館、博物館、文書館から選出された者及び学識経験者とする。

(役員)

第5条 実行委員会に次の役員を置く。

- 一 会長 1名
 - 二 副会長 2名
 - 三 監事 1名
- 2 会長は、近代美術館長がこれにあたる。
- 3 副会長及び監事は会長が指名する。

(役員の職務)

第6条 会長は、会務を総括し、実行委員会を代表する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行する。

3 監事は、実行委員会の会計その他の事務を監査する。

(役員及び委員の任期)

第7条 役員及び委員の任期は、実行委員会が解散するまでとする。

(会議)

第8条 実行委員会の会議は会長が招集し、会長が議長を務める。

2 会議は、委員の過半数をもって成立する。

3 委員は、会議の際、委員の所属する組織の構成員を代理出席させることができる。

4 会議の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(事務局)

第9条 実行委員会の事務を処理するため、博物館内に事務局を置く。

2 事務局に関し必要な事項は、会長が別に定める。

(会計年度)

第10条 実行委員会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終了する。

(解散)

第11条 実行委員会は、その目的が達成されたときに解散する。

(その他)

第12条 この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営について必要な事項は、会長が別に定める。

附則

1 この規約は、平成28年2月2日から施行する。

資料編

(別紙) 「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会の構成

■役員

職名	氏名	所属・所属先での職名
会長	小林 功	徳島県立近代美術館 館長
副会長	湯浅 利彦	徳島県立博物館 館長
副会長	山下 知之	徳島県立文書館 館長
監事	真鍋 憲人	徳島県立博物館 課長補佐
委員	大石 雅章	鳴門教育大学理事・副学長、徳島県立文書館協議会会長
委員	町田 哲	鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授、徳島県立博物館協議会副会長
委員	小西 昌幸	元北島町教育委員会教育次長

■職員

職名	氏名	所属・所属先での職名
事務局長	久米 みどり	徳島県立博物館 副館長
事務局員	長谷川 賢二	徳島県立博物館 人文課長
事務局員	松永 友和	徳島県立博物館 主任
事務局員	森 芳功	徳島県立近代美術館 企画交流室長
事務局員	友井 伸一	徳島県立近代美術館 上席学芸員
事務局員	徳野 隆	徳島県立文書館 課長補佐(生涯学習課主幹)
事務局員	金原 祐樹	徳島県立文書館 課長補佐

(別紙) 平成28〔2016〕年3月31日まで 「徳島県の文化の創造的再発見事業」実行委員会の構成

■役員

職名	氏名	所属・所属先での職名
会長	小林 功	徳島県立近代美術館 館長
副会長	高島 芳弘	徳島県立博物館 館長
副会長	山下 知之	徳島県立文書館 館長
監事	真鍋 憲人	徳島県立博物館 係長
委員	大石 雅章	鳴門教育大学副学長、徳島県立文書館協議会会長
委員	町田 哲	鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授、徳島県立博物館協議会副会長
委員	小西 昌幸	北島町教育委員会 事務局長

■職員

職名	氏名	所属・所属先での職名
事務局長	久米 みどり	徳島県立博物館 副館長
事務局員	長谷川 賢二	徳島県立博物館 人文課長
事務局員	松永 友和	徳島県立博物館 主任
事務局員	森 芳功	徳島県立近代美術館 企画交流室長
事務局員	友井 伸一	徳島県立近代美術館 上席学芸員
事務局員	徳野 隆	徳島県立文書館 課長補佐
事務局員	金原祐樹	徳島県立文書館 課長補佐

連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男・酒井弥蔵 × 現代アーティスト・大久保英治」展 入場者数
 ・図書館 2016年7月5日(火)～8月21日(日)・美術館・文書館・博物館 2016年7月20日(水)～8月29日(日)

	日	曜日	図書館	美術館			博物館			文書館	全館合計	
			計	ロビーカウンタ	鳥居前センター (1/2)	計	鳥居前センター (1/2)	常設	計	計		
7月	5	火	535								535	
	6	水	521								521	
	7	木	380								380	
	8	金	395								395	
	9	土	560								560	
	10	日	754								754	
	11	月									-	
	12	火	539								539	
	13	水	435								435	
	14	木	429								429	
	15	金	383								383	
	16	土	670								670	
	17	日	673								673	
	18	月	731								731	
	19	火									-	
	20	水	437	56	211	267	211	56	267	133	1,104	
	21	木		126	320	446	320	280	600		1,046	
	22	金	800	59	174	233	174	205	379	71	1,483	
	23	土	954	258	698	956	698	788	1,486	274	3,670	
	24	日	901	468	838	1,306	838	1,289	2,127	133	4,467	
	25	月									-	
	26	火	599	139	333	472	333	433	766	77	1,914	
	27	水	588	163	387	550	387	466	853	172	2,163	
	28	木	524	155	376	531	376	454	830	159	2,044	
	29	金	557	180	290	470	290	513	803	185	2,015	
	30	土	596	334	688	1,022	688	947	1,635	112	3,365	
	31	日	830	617	1,003	1,620	1,003	1,670	2,673	183	5,306	
	8月	1	月									-
		2	火	571	148	402	550	402	590	992	80	2,193
		3	水	567	225	481	706	480	581	1,061	146	2,480
		4	木	523	210	433	643	433	502	935	96	2,197
5		金	610	152	397	549	397	484	881	81	2,121	
6		土	602	336	715	1,051	715	1,052	1,767	172	3,592	
7		日	639	754	1,024	1,778	1,024	1,387	2,411	203	5,031	
8		月									-	
9		火	704	301	549	850	549	743	1,292	135	2,981	
10		水	679	304	516	820	516	831	1,347	125	2,971	
11		木	665	677	937	1,614	937	1,625	2,562	163	5,004	
12		金	630	458	1,024	1,482	1,024	1,560	2,584	98	4,794	
13		土	718	526	1,049	1,575	1,049	1,810	2,859	102	5,254	
14		日	530	647	1,140	1,787	1,140	1,812	2,952	106	5,375	
15		月	535	739	1,070	1,809	1,070	1,895	2,965	98	5,407	
16		火	630	378	675	1,053	675	1,074	1,749	100	3,532	
17		水	604	345	628	973	628	910	1,538	181	3,296	
18		木		259	497	756	497	685	1,182		1,938	
19		金	630	214	420	634	420	519	939	85	2,288	
20		土	803	496	858	1,354	858	1,319	2,177	210	4,544	
21		日	952	1,435	1,998	3,433	1,998	2,586	4,584	781	9,750	
22		月									-	
23		火		216	489	705	489	678	1,167	81	1,953	
24		水		221	441	662	441	579	1,020	108	1,790	
25		木		172	290	462	289	437	726	158	1,346	
26		金		175	368	543	368	517	885	83	1,511	
27		土		308	585	893	585	1,012	1,597	257	2,747	
28		日		422	785	1,207	785	1,608	2,393	207	3,807	
合計			25,383	12,673	23,089	35,762	23,087	33,897	56,984	5,355	123,484	

資料編

入場者数

つるぎ町会場 織本屋 入場者数
2016年10月1日～10月30日

月	日	曜日	男性	女性	子供	日計
10	1	土	3	8		11
	2	日	6	8		14
	3	月	3	1		4
	4	火	4	1	3	8
	5	水	2			2
	6	木		2		2
	7	金	2	3		5
	8	土	13	36	3	52
	9	日	10	12	2	24
	10	月	7	4		11
	11	火	1	1		2
	12	水	1			1
	13	木	3	1		4
	14	金	4	2	1	7
	15	土	1	1		2
	16	日	3	9	1	13
	17	月	4	3		7
	18	火	4	6		10
	19	水				休館日
	20	木	7	13		20
	21	金	6	4		10
	22	土	4	5	1	10
	23	日	22	10		32
		展示解説				25
	24	月	1	1		2
	25	火	2	3		5
	26	水	4			4
	27	木	7	4		11
	28	金	2	7		9
	29	土	12	8		20
	30	日	2	3	1	6
31	月	7	3	2	12	
合計			147	159	14	320
総計						345

鳴門会場 鳴門市立図書館 入場者数
2016年11月5日～12月1日

月	日	曜日	一般室	児童書	調査研究室	計
11	5	土	281	165		446
	6	日	255	125	78	458
	7	月	161	74	24	259
	8	火				0
	9	水	158	34	12	204
		展示解説	13			13
	10	木	152	75	18	245
	11	金	150	38	10	198
	12	土	208	104	66	378
	13	日	204	97	65	366
	14	月	149	37	18	204
	15	火				0
	16	水	146	81	6	233
	17	木	141	65	9	215
	18	金	122	52	30	204
	19	土	180	143	50	373
	20	日	163	126	37	326
	21	月	150	49	13	212
	22	火				0
	23	水	212	105	65	382
	24	木	178	68	12	258
	25	金	128	57	19	204
	26	土	198	86	16	300
	27	日	161	97	83	341
	28	月	168	53	25	246
	29	火				0
30	水	186	61	18	265	
12	1	木	188	65	21	274
計			4,052	1,857	695	6,604

海陽町会場 海陽町立博物館 入場者数
2016年12月10日～2017年1月22日

月	日	曜日	人数	月	日	曜日	人数
12	1	木		1	1	日	休館日
	2	金			2	月	休館日
	3	土			3	火	休館日
	4	日			4	水	5
	5	月			5	木	6
	6	火			6	金	1
	7	水			7	土	5
	8	木			8	日	4
	9	金			9	月	8
	10	土	9		10	火	休館日
	11	日	9		11	水	4
	12	月	休館日		12	木	3
	13	火	2		13	金	2
	14	水	8		14	土	10
	15	木	9		15	日	7
	16	金	41		16	月	休館日
	17	土	35		17	火	8
	18	日	8		18	水	3
	19	月	休館日		19	木	5
	20	火	7		20	金	2
	21	水	5		21	土	2
22	木	5	22	日	48		
23	金	0	23	月	32		
24	土	7	24	火	2		
25	日	3	25	水	5		
26	月	休館日	26	木	4		
27	火	5	27	金	11		
28	水	6	28	土	9		
29	木	休館日	29	日	20		
30	金	休館日	30	月	6		
31	土	休館日	31	火	12		
合計		159	合計		123		
総計				282			

※各会場から報告のあったものを転載



チラシ表



チラシ裏

ポスター

●広報物としては、ポスター、チラシのほか、特設ホームページ (<http://www.art.tokushima-ec.ed.jp/awanomichi/>) も開設した。また解説冊子 (A4板 16ページ カラー) も発行し、無料配布した。

- 新聞、テレビ等
- ◎「文化の森 16年度も多彩な企画 事業計画決まる 3館連携「阿波の道と人」 徳島新聞 2016年3月28日
- ◎「阿波の道を歩く 20日から文化の森」 徳島新聞 2016年7月4日
- ◎「フォーカス徳島」四国放送 2016年7月20日

解説冊子表紙



解説冊子中面

プレワークショップ「美術家・大久保英治と「石」をたてる：
水平と垂直、境界、祈り」

【日時】2016年7月18日(月・祝) 9:30～12:30

【場所】徳島県立近代美術館講座室、文化の森前・園瀬川
河川敷、博物館2階ロビー

【講師】大久保英治(美術家)

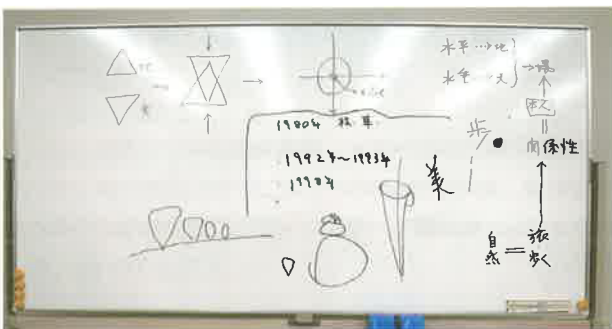
1 徳島県立近代美術館講座室にて



「美」っていうことをすごく考えている。いろんな本を読んでいくうちに、美術というのは美しくないとかかんらしい。では「美しい」とは何か、何をもって「美しい」というのか。人に聞き、本を読む。考えれば考えるほど難しい。

今、一般に喜ばれるものとしては、たとえばチームラボのデジタル技術を駆使したもの。たとえばこれに感動するとする。では、感動するなら、それは「美しい」といえるのか。あるいは「美しい」と感動したらそれは美術なのか。そのようなことを考えながら、今日は自分で分かっていると思うところまで責任を持って話します。

ということで、水平と垂直と言う話をします。僕は歩く人なので、大地、道路、山、谷・・・いろんなところを歩いて、いろんなところに行きますが、地というのは、僕はいつもこういう「かたち」で描いています。(△地)。空を見上げて空気を吸って、その時、天は上から下に降りてくるものとらえる。これを合体したところがこういう「かたち」になる(▽天と△地の合体形)。天と地の気。気分の気。それは人間が持っている素晴らしい心だと思えます。そういう気、空気を表すためにこういう「かたち」をつくる。僕とつきあいが長い人は、こんな作品を見たことがあると思えます。杖で作ったり、石で組んだりしてこんな「かたち」に作る。



(レクチャー時の板書)

では、それはどんな場所で作るか。僕は歩いて、時間・空間が過去から現在、未来にむかって歩くというのを水平思考(1)で考えている。じゃあ、どんなことを水平思考って言うのか。簡単に言えば、水平思考というのは、あでもないこうでもない、ほんとに正しいのかな、どうなのかな、ってやることなんです。私はそういう水平という思いをもって野や山を歩くわけです。私はどういう人間なのか、何をするのか。そしてある時、木々を見て、ああ、いい木だなあ、きれいだなあ。ふと見ると、花が咲いている、そういう場所で「あっ」と感じて作ってみたいくなる。このように思いがクロスした場所がsite。場所性。そこでしかできないことがある、そういう場。本人・私がそういう場を見つけて作る。そして今度はこのような関係を他者との関係になぞらえると、他者と社会との関係性もできてくる。このあたりにどうやら、僕が求めている美術作品があるんじゃないかな。

では次に、その場所に行くためには、どうやって行くか。歩いていくのか、そして旅とは、と考えてみる。僕は歩くことも旅、近所に買い物に行くのも旅、という考え方をしています。旅って言うのは、AからBに移動する、その間のことを旅というとする。たとえば、買い物に行く。その時にゆったりとして近所のおばちゃんといついつい1時間、2時間しゃべるとする。で、また思い出して買い物に行く。果たしてこれは旅なのかどうか。もしこれが旅でないなら、それだったらどんなことを旅なのか?この話は大変長くなるから、あまり深入りしないようにしたいと思いますけれども、要は、僕は、旅っていうのは、まあ、あんまりゆっくりとするのではなく、目的に向かって歩く方がいいんじゃないか、と思えます。それから、目的っていうことでいえば、たとえば僕の親は岡山の田舎のほうで生まれて亡くなった訳ですけど、その葬式に行くときも旅。これはね、今僕はかっこつけて言ってるけれど、これは哲学者が書いたフレーズです。(2)

それで、旅というのはいろんなことがある。作品を作るためじゃなくても旅はあるってことです。「後戻りはしない。そして、あまり1カ所に逗留しない。そうやって前に進んでいくことが旅」っていう風に僕はとらえている。そういう思いをもって野山を歩いている。そして、そういうなかで、ふと気づくことがある。自分以外のものと出会う。汽車に乗ったりする。車に乗ったり自転車に乗ったりすることも含めて、その人にとっては「自然」ということなのではないかと、そういう風に僕は思っている。

(スライドを見ながら)

ということで、水平と垂直を最も端的に僕が表現しようとしたものをスライドで連続して見ていきます。要は、「石を立てる」というのが今日のテーマなので、石を立てたところだけをお見せします。

最近、石を積んで心を癒やすようなもの(ヒーリング)や、石を積んでバランスをとるようなもの(ストーンバランスング、ロックバランスング)についての本がいっぱい出ていたり、テレビで紹介されたりしているようですが、僕の作品はそういうものとは違うのではないかと、思っている。

僕は1980年頃から、枝や自然の持つ素材を扱った制作をしていきました。石については、定かではないのですが、始めに石を立てたのは1992年か93年ぐらいです。本格的に「皆さん見てください」と写真に撮って公に出したのは1996年です。石という存在を使って初めて作品化したのは、それより少し前です。



(1998.3/23 水面と大気の間 鮎喰川の河原 その1)

これは鮎喰川のキャンプ場(神山、軽井沢レジャーランド)、刑務所からもう少し上流にいったあたり。水辺でキャンプしながらの制作で、意図的に二段に積んでいます。



(1998.3/23 水面と大気の間 鮎喰川の河原 その2)

これは更にもっと意図的です。石を立てたり並べたりすることについては、あちらにおられる徳島県立博物館のみなさんの方がずっと詳しいですが、世界的に有名なのは、ストーンヘンジ、イギリスの。ああいう荒涼としたところに巨大な石を円形に並べているというのを、すぐにみなさんイメージすると思います。ところがどっこい、日本にも東北に行くと環状列石ってあって、こんな風に石を組んでいるところは山ほどあります。で、昔イギリスに1年間留学した時に、スコットランドからもっと北の方の島に行きました。今、原子力発電所でこういうかたち(カタカナの八のような形)をしたものがありますよね、円形で二重構造になっていて。それと全く同じ形をした、石で組んで二重構造に

なったものが、そのイギリスのスコットランドの北の島のなかにあります。冬の寒いときは内側、その二重構造の間で火を焚くんです。そうすると煙が上に逃げていく。そんなオンドル式の住居跡がある。

「ああ、世界のいろんな所で、同じ時代に同じようなスタイルのものがあるんだな」と思って、それで東北地方の資料をみながら、それ(環状列石)をインプットする。で、こういう作品ができる。それは「場」(site)があるまでにすでに、その前からこのあたりから(P.17 板書の site の図の中心から少し離れたところを指しながら)エネルギーが、自分の中にエネルギーができています。で、目の前に石がある。「作ってみたい」ってなる。それが「場」(site)。

博物館とか図書館に行くと、縄文時代の資料を見ると必ずこういった似たようなものが出てきます。たとえば東北地方には、夏至の日とか、春分の日とかにあわせて、石がこういう風に(環状に)並んでいるものが残っている。この時代の人たちは、もうすぐ冬が来る、春が来る、種まきをせんならん、木の実を取らなきゃいかん、といったように、生活と自然がそれぐらい密接に直結しているために、常に生活とともに気候風土ということをとらえようとする、そういうことの一端をできればなあ、と、思って作った作品です。



(1998.3/23 水面と大気の間 鮎喰川の河原 その3)

これは今はやりのヒーリングに近いものです。大きな岩の上にああいうふうのにのせて。ちょっと宗教まで行かないけれど、「しゅ」ぐらいを取り入れてみたら、人はどういう風に反応するかな、と、思って作った作品です。



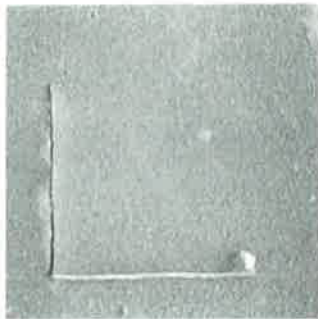
(1998.3/31 鐘のひびき 鷺敷林間キャンプ場)

これは、お寺の鐘をイメージしました。コーン ウンウンウン。谷に響く。そういう気持ちを入れながら作りました。



(1998.4/2 水を見る 内妻海岸 内妻浜)

これは、作ってるうちに気持ちとテクニックが不足して非常に困った作品です。思いが、やってるうちに切れてきて、崩れたりするたびにエネルギーが切れてくるわけです。思いも、でもなんとか、水を見る、一点だけから見るようにしたい。本当はここまで(水の見えているところは全部)全部蓋をしたかった。ところがエネルギーが切れてくるから。この作品はここからだけ(上部の石の隙間あたりを指さして)水が見える。小さいところから、秘密の穴から、ものを見るのと同じように、「水」というものを考えさせる、そういう思いを持って作った作品です。



(1998.4/3 砂のかたち 生見海岸 高知県東洋町)

これはね、最小のエネルギーと表現で、最大の効果が出た作品だと思って、我ながら「してやったり」の作品です。この枝は(水平、横向きに置かれた枝)最初はここに(垂直、縦方向の砂の上の線)に埋まってたんです。これを、そおと取って、ここ(水平、横方向)に移動させた。この形(横に置かれた枝)はここ(縦の線)にある。版画、版画の発想が大地でもできる、ということの証明です。版画、一個しかできない版画(モノタイプ)です。それに石を一個置くということで、そのバランス、空間を問う。この作品は、平面とか立体とか、いろんなことを問うための非常にいい素材ではないか、と。この作品は小さい、こんなもんです(両手ぐらい)。是非皆さんも、海岸を歩いたり、おうちの庭に、半分だけ石が埋まっているのを見つけるとする。それを、そおと取って横に置く。そうするとこの石の存在がここ(穴)に、その存在が、石はないけれど穴の中に空間としてある。それを写真に撮る。そしてまだ10年おいておく。そうするとこの石がまた埋まる。そうして長いこと楽しめるのではないか、ということです。



(1998.4/3 海流 生見海岸 高知県東洋町)

これはね、海水をペットボトルに、海岸に落ちていたペットボトルに入れただけ。要は、水というのは常に、お椀に入れても表面はまっすぐになる。それを利用した作品や作家はたくさんあります。そういうのをヒントにしながら僕は海水をいれて、こんな風に立てて置く。この器(ペットボトル)によって垂直に見える。「見える」というイメージです。あくまでもイメージです。



(1998.4/4 海に立つ石 家族 日沖 高知県室戸市)

よく見てください。石がいろんなところに積んであります。青森の恐山に行かれたら、もっともっとありますし、韓国のお寺にも、こういうことをもっと巨大な敷地に作っている人がおります。積んだのは、恐山は巫女さんで、韓国の場合はお坊さん、僧侶。積むという行為、たとえば徳島の駅前で石を積んでいたらみんなぎよっとするだろうけれど、自然の中で、人のあまりいないところで石を積む。積んでる人の姿、積む人の姿、積む人自身の心、ということが、やはり宗教的であるし、先ほどから「美しい」という言い方をしましたが、そこに「美しさ」が隠れているんじゃないか、という風に思います。これをやっている時、積む、風が吹いてくる、で、こっちに行く、風が吹いてくる。コン、ガラガラ。倒れる。で、そういうことも含めて、自然と一体感を持つような行為をする。だからこれが作品か、といったらそうでもないかも知れない。行為、行為として僕はやる。その行為が作品かどうか、というのは美術館の学芸員にお任せします。



(1998.4/25 祈 那賀川の河原 羽ノ浦町)

これは、今日のテーマの「祈り」ということに近くなる。僕が昔、若いときに、インド、ネパール、スリランカとかいろんな所を旅しながら向こうの文化に触れる中で味わった経験を那賀川の河川敷で作ってみたいとなったわけです。それでこういうのを作った。いま海外の話をしましたけれど、日本にも、中世から近世に経文塚という、石に南無阿弥陀仏とか書いた塚がある。いろんな地方に行くと、そういう経文塚がある。人類は同じような経過をしているなどということを思いながら作りました。



(1998.4/26 石を立てるシリーズ 蒲生田岬、4/27 北の脇、5/10 足摺岬)

このように石を立てることに言いたいのは、まず水平と垂直という点が一つ。それと、どこでもなんでもいから、石を立てたらいいわ、という風には思わないで欲しいなあ、という点が一つ。これは僕の希望です。

立てるときにその人がどんな意味を持って、どこに、ど

んなことを伝えたいかということ、できるだけ考えて欲しい。これは作品について全て共通することだと思います。「むやみやたらにするんじゃない。やりたくなる、それはなぜか」というような問いをかけながら石を立てる、という行為は祈りに通じるのではないか、という風に思います。

今日は屋外で少し石を立てたり、積んだり並べたり、いろんなことをしてもらいたいと思います。それを、一つでも二つでも、自分の記録、と分かるようにマジックで書いて、僕の作品とドッキングしてみたいと思います。最後は。



(1998.5/10 石をつむシリーズ 神秘的場 足摺岬)

もういっぱい、こう、積んでます。こういう石を積むということ。どういうサインをほかの人に伝えていくかということ、それぞれが考えてもらえたら嬉しいと思います。で、その話も聞かせてください。

友井さん(徳島県立近代美術館)が書いた文章(3)の中に、石を積んだりすることの、他の民族の人の話が出てきます。そういうことも含めて、決して石をバランス良く立てられるという人は特殊な能力があつてするわけじゃない。そして全ての人類が石という一番身近にある自然物に対する畏敬の念を持っていると思う。そして取り組む素材として、石というのはすごく扱いやすい。だからこそ、ものすごく難しい。誰でもできるんです、石を立てるといのは。幼稚園児にワークショップをしても、幼稚園児はいとも簡単に立てる。石を。それもこんな小さいのを。小さい方が難しい。今日やってみてください。大きい方が楽なんです。大きい石は自分で体重、重力を持ってるから。要はこれ(逆▽形の図を書き、その石の重心)がまっすぐ(垂直)になるということ。こちら側に比重があつたとしたら(向かって左を示す)、こちら側(反対側)にピュッとある(膨らみを書き足す)。この辺がこうなって、こうなっていくとき(○を石に見立てて、それらを順に上に積み上げていく図を書きながら)、バランスというのは、常に点である(指を下に向けて、重心点が下に向かう仕草をしながら)。ところが小さい石を一個だけ立てるとしたら、軽いからちょっとしたことや、ちょっとした風で倒れる。だからもし小さいやつでチャレンジしたかったら、大きいやつから小さいやつに、順番にこうやって並べていって見たらおもしろい(左から右へ、だんだん小さい石を並べていく図を書きながら)。そうすることによって、自分の手先とかが意識できる。そして器用な人はダメです、手先の器用な人は。不器用な人の方がうまくいく。不思議なんです、これが。僕はものすごく不器用なんです。鋸(ノコ)一つも引けないような不器用さを持っています。器用な

人は簡単に作れるから意欲が湧かない。不器川な人は、もっともっと、と思うから、いい作品ができる、ということです。

いま言った水平とか垂直という話は、僕自身は長いことやってきてるからもう分かってきてるから、つつい端折ってしゃべってしまいます。大学の先生や高校の先生とかはそれが専門なので、もっと時間を掛けて、垂直とはどういうことかとか、もっと丁寧にしゃべると思います。僕は専門的に教師としての学習をした経験がないので、常に僕は自分で体験をして、それを言葉に置き換えているだけなので、つつい端折ってしまうクセがあります。そのところで、不明な点があれば質問してください。

(この後は断片的に)

河原で石を拾い、立てて、写真を撮って、ロビーで積む。その後でまた別の場所に行って、別の石を拾って、二つを並べて写真を撮ると、それは絵はがきになります。

徳島は江戸から明治に掛けて面白い人を輩出しています。博物館で今、邪馬台国のことで大正時代に大和説を唱えた人(笠井新也)。学会で悔しい思いをしたが、いま、彼の言ったことは正しいのではないかと言われてきている。徳島にはユニークな人がいる。

石井町に天皇反対(いらん)のおじさんがいる。調べてみたらユーチューブにもいっぱいである。天皇制のことをもう一回考えてみるのも面白いかな、と本屋でさがしてみたら、『卑弥呼と天皇制』(小路田泰直著 2014年 洋泉社)という本があった。それを読んでいたら、邪馬台国の大和説を唱えてる人、卑弥呼について書いてる人は、大正時代、1922年に徳島の中学校の先生だったと書いてある。いつかこの人のことを調べてみようと思っていて、今回作品の搬入・展示に徳島に来たら、ポスターが貼ってある(徳島県立博物館部門展示「没後60年 笠井新也」2016年5月31日(火)～7月31日(日))。やっぱり地元は早いな一、と思った。ひょっとしたら僕の方が先に知ってるんじゃないか、と喜んで、いつか徳島でこのことをしゃべってやろう、と思っていたら、もうちゃんと、この笠井新也という人が取り上げられていた。

弥蔵に関しても、友井さんや文書館の皆さんからも情報を仕入れて、これを追いかけてみようと思っていた。二人(大久保、友井)で焼山寺から歩いて、大日寺まで歩いている間に、彼(友井)が「大久保さん、変な人がおりますよ」という話をきいた。それが酒井弥蔵。そして、その人をひもとくために文書館でいろいろ話を聞いていると、その人の人物像が見えてくるわけです。単に俳句が好きで芭蕉にあこがれた、というだけではなく、その人の人物像が見えてくる。

作品についても、僕が思うのは、作り手っていうのはそれぞれが似ているけれども違う、その人の人物像が背後にある、と思うので、自信を持って作って欲しいと僕は思う。それ(作品)が見られるようになる、人に見てもらえるようになるまで続けなければいけない、という風に思っ

ています。

僕はこういうレクチャーの時と酔っ払ったときしか言わないんですけどね、多くの人はレッスンプロになる。教えるのは上手、でも作品を作ることはできません。例えばゴルフの世界にもレッスンプロがたくさんいます。でもゴルフでは真正面からレッスンプロとしてやろうとしていて、それが背後にあるわけです。でも美術の世界ではそうじゃないことが多い。口は達者やけど、作品制作からその人の人物像がなかなか見えてこない人が多いんです。この機会に、是非作り手の人物像がうかがえるようなふうにやってほしい。

また、20年やってるからいい作品、一年しかやってないから悪い作品、ってことは、決してない。たった一個しか作ってなくても、そのできたものは素晴らしいかもしれない。そんな風なことで関わってもらえたら僕は嬉しいです。

僕は大学とか韓国とかいろんなところでレクチャーをしてきたけれど、普通は、その時は質問は受け付けません。自分の話をしに来ているわけだから。簡単に言えば自慢をしにきている。でも徳島にはもう何回も来て、レクチャーもしてきたので、今回は大いに語り合いたいと思っている。

それで、「美術」という言葉は「芸術」よりも上か下か、と僕は考えたことがある。芸術の中に美術があるのか、美術の中に芸術があるのか。それから芸術の中、美術の中、あるいは音楽の中に哲学、思想はあるのか、そういうことをよく考えます。それで、やっぱり哲学を持たなきゃならない、僕はいつもそう思っています。僕がどういう風にしてこんなことを思うようになったのか。たとえば平面。平面って何ですか。平面って見たことがある人いますか、問いかけてみる。そこで紙を持って「ここに平面があります」と言う。でもそれは本当に平面ですか。それは縦と横しかない平面ですか。いいや、厚さがある、と僕は考えるわけです。これはほとんど性癖みたいなものです。これは僕が美術を始める前からのことだと思います。

点、線、面。(大きな点を描いて)これは点に見えますか。むちゃくちゃ広いところから見たらこんなんは豆粒。でもこの中に、この点の中にずーっと入っていく。ほんならこの点がでっかくなってくる。となると今度は面っていうのは何か、じゃあ線は、と。

僕は、枝や草を使い始める1980年頃の10年ぐらい前に、これにはまってたんです。点・線・面に。「みんな線って言うけれど、あれ線かなあ」。線の中にずーっと入っていく訳です。そうすると面になる。でも平面(厳密な二次元)ってほんまにあるんかな、と考える。ええ、あるんですよ。我々の頭の中に。これはスペシャルなトークです。頭の中にある。それだけ覚えて帰ってください。

(園瀬川河川敷に移動)

2 園瀬川河川敷でのワークショップ

(石を積む見本を見せながら)

一番大事なことは、自分で素材をさわるといこと、見るだけでは絶対ダメです。さわるといこと。

これは昔、高知県の山の中でのワークショップの時のこと。「そんなこと言うけど、あなたは自然を相手にしながら、自然のワークショップをしながら、自然の草花をちぎってる、おかしい」と言われたことがある。「そして枝をむやみやたらと使ってる」とも言われた。反割り箸運動のおばさまたち、その人たちが来て、僕にそう言うわけです。もちろん自然を大事にする、環境を大事にする、それは大切なことですよ。そこで、その人たちに僕はたずねた訳です。「失礼ですけど、みなさんは今日どのようにしてこの場所に来ましたか？」全員、自動車で来ているんです。車の排気ガスと私がちぎる葉っぱと、一体どちらが重みがあるのか。自然を大切に考える考え方として。その人たちと議論した。反割り箸運動。「自然を大事にする」という価値観も共に学ばないといけない。

葉っぱには表と裏の違いがある。全世界のネイチャーアーティスト(自然派主義)と言われる作家は、こういうことばかり考えている。この葉っぱの中味について我々は問おうとしている。表と裏、その間は何か。世の中のものとの間とは何か。そして色。光合成。天と地の間の光合成。いろんなことを問おうとしている。

石は必ず立つんだから。でもダメなら、その支えとなるものを、ばれないようにおいてください。僕はよくこういうところに立てる(すこし砂のある場所)。マジックのように思われる。でも小さい砂がどっかで支えている。我々には見えないから。そしてだんだん卑怯者になる。砂をまく。そうやって立たせたものは、ほんとにそれでいいのか。だけど、僕は時間が限られた中で見せなくてははいけない。見せるのも仕事だから。

「あれ、どうやって立っているのか」と聞かれる。飛行機の部品でものすごく強い部品がある。それを刺す、と答える。「ああ、そうですねえ」。全世界どこへ行っても、何か仕掛けがあるんでしょう、と聞かれる。聞いた人は仕掛けを知ったことで安心する。見てはいけないものを見た、ということで安心する。

僕が高知で石を立てた時に、地球の裏側でもう一人同じことをした人がいる。ニューヨークの広い公園の中で、彼は3段積んだ。「じゃあ僕は4段積んでやろう」と思った。でもやっているうちに、「もういいわ」と考えるようになった。そういうふうなトリッキーさを求めたり競うのではなく、今日は風景の中で自分の印象に残ったことは何かを考える。そして足元を見て、それからその石の一番いいところ、その立った石が一番美人、男前にみえるポジションで写真を撮る。どこでもするのではなくて、周りの風景を考えて、何かをテーマをもって、石を立てて写真を撮る。たとえば自動車が走っているところを背景にして、現在の生命観と、ずっと時間の流れている石の生命観を考える。あるいは緑と白を合わせてみる。自分で何かテーマを持って下さい。

どこでもいいから石を立てる、というのはやめて下さい。では始めましょう。1時間。

祈り、ケルン、道しるべ。交通の要衝。そういうことを知ってもらうためのワークショップです。



(河川敷でのワークショップの様子)

(参加者はそれぞれ石を立て、それを写真に撮り、お気に入りの石に目印を付ける。その後、博物館2階ロビーに移動)

3 博物館2Fロビーにて



(参加者は、園瀬川からの石を地図上に積んで、ケルンを作る。)

(〈水平と垂直1〉を前にして)

弥蔵と、阿波の五街道(淡路、讃岐、撫養、伊予、土佐)と徳島の遍路路。徳島にはいろいろな道があります。そしてたとえば同じ名前の街道でもいくつかルートがあります。たとえば伊予街道といっても、いろんな道があったそうです。一昨年ぐらいから徳島で自主的にワークショップをやっているグループGという美術のグループがあり(2016年1月解散)、その人たちと一緒に、まず撫養街道を歩きました。そのあとは、数人の仲間と徳島の遍路道を歩き、それから讃岐街道、土佐街道、伊予街道を歩きました。そして徳島を中心に西と南北に歩いたところを地図の上に線で描きました。(地図上の県境に積んだケルンをそれぞれ指しながら)これは大坂峠、ここの向こうは水床トンネル、ここは鷲の門から境目峠まで。自分で思いを込めて描きました。祈りですから。

水平と垂直ということで世の中が成り立っている、ということが分かってもらえればうれしいです。

江戸後期から明治にかけて生きた酒井弥蔵という人物がいた。フランキー堺はその子孫だそうですが、そ

う意味でも徳島には稀有な人がたくさんいた。これからも
そういう人たちを発掘して、その人たちの思想とか、また徳
島の地形とか、もっと知りたいと思っています。どこかでま
たお会いすることがあれば、「おっちゃん」と声を掛けてく
ださい。それから、この次には、四国をたすき掛けして行
きたいと思っています。国道438号、国道ならぬ「酷道」
と書くそうです。近いうちにこれを歩こうと思っています。
みなさんも機会があれば。今日はありがとうございました。

(1) 水平思考(すいへいしこう、英:Lateral thinking)
は、既成の理論や概念にとらわれず様々な視点から問題解
決を図る方法であり、エドワード・デボノが1967年頃に提唱
した(ウィキペディア)。これに対して論理的、分析的な従
来の思考を垂直思考(vertical thinking)と言う。ここでの
大久保は、根本的な問いを追求しながら歩き、そこに発生し
交錯する様々な思いが創造を生むきっかけとなっていると
いう実感を水平的なものとしてとらえている。大久保にとっ
て歩くことは、このような水平的な発想を促す行為である。

(2) 三木清『人生論ノート』新潮文庫 1978年

(3) 「大久保英治の新作〈三望庭〉〈十二支〉〈鎮海の石
の音〉について」『徳島県立近代美術館研究紀要』第17号
2016年3月 pp.2-20

※スライドのモノクロ写真は『大久保英治 四国の天と地
の間 阿波の国から歩く』展図録 徳島県立近代美術館
1999年 より転載

(編集 徳島県立近代美術館 友井伸一)



全体事業名称
徳島県の文化の創造的再発見事業

構成事業名称
「阿波の道と人」展示事業

連携展示
「阿波の道を歩く
芭蕉をめざした男・酒井弥蔵×現代アーティスト・大久保英治」展

